

# 鳴門教育大学の教育等に関するアンケート

【平成19年10月実施】

## <分析報告>

1	目的	1
2	方法	1
(1)	対象者	1
(2)	実施時期	1
(3)	教育長・学校長へのアンケートの内容	1
(4)	学部卒業生・大学院修了生	2
3	教育長・学校長へのアンケート結果と考察	2
(1)	鳴門教育大学の学部を卒業した教員の全体的な印象	2
(2)	鳴門教育大学の大学院を修了した教員の全体的な印象	3
(3)	今後の教員の在り方を見据え，鳴門教育大学で伸ばして欲しい能力	3
(4)	自由記述	4
(5)	教師のキャリア段階	4
(6)	大学院修了生に対する評価の向上	4
(7)	学校における人間関係能力	4
4	学部卒業生・大学院修了生へのアンケート結果と考察	5
(1)	入学動機	5
(2)	本学の教育に対する評価	6
(3)	自由記述	11
5	鳴門教育大学・大学院の教育改革	11

## 1 目的

鳴門教育大学の教育の状況について、教育長・学校長及び本学の卒業生・修了生の意見を把握することにより、教育の質の維持・向上及び教育研究体制の一層の充実を図るとともに、自己点検・評価に適切な形で反映させることを目的として、アンケート調査を実施する。

## 2 方法

### (1) 対象者

教育長・学校長（徳島県内の教育委員会教育長，徳島県内の公立の幼・小・中・高・特別支援学校長）：351人（回収率 63.9 %）

学部卒業生（平成 15～18年度）：115人（回収率 26.6 %）

大学院修了者（平成 13～18年度）：418人（回収率 30.1 %）

### (2) 実施時期

平成 19 年 10 月に、各対象者にアンケートを郵送した。

### (3) 教育長・学校長へのアンケートの内容

鳴門教育大学の学部を卒業した教員の全体的な印象について、表 1 に示すように 10 項目を設定し、5 件法（5 段階評価）で回答を求めた。

同じく、本大学院を修了した教員（ほとんどが 2 年間派遣の現職教員）の全体的な印象について尋ねた。

今後、本学でどのような能力を伸ばすとよいかについて、責任感，コミュニケーション能力，専門領域における知識など 15 項目を設定し，3 件法で尋ねた。

本学の教育について，自由記述で尋ねた。

表 1 質問項目

---

1	使命感	「教育者としての使命感や自覚がある。」
2	愛情	「生徒（幼児・児童を含む。）に対する教育的愛情がある。」
3	教養	「広く豊かな教養がある。」
4	教科指導力	「教科指導（授業）において実践的力量がある。」
5	生徒指導力	「生徒指導において実践的力量がある。」
6	学級経営力	「学級経営において実践的力量がある。」
7	保護者の信頼	「保護者から教師として信頼されている。」
8	協調性	「教職員組織の一員として，他の教職員との協調性がある。」
9	指導力	「教職員組織において，指導力（リーダーシップ）がある。」
10	総合的評価	「総合的に評価して，教員として満足できる。」

---

(4) 学部卒業生・大学院修了生

本学への入学動機を、6項目から1つ選択するように求めた。

教育内容、教育環境、大学教員、学生生活、成果などについて質問項目を設定し、5件法で回答を求めた。

鳴門教育大学に対する要望等を自由記述で尋ねた。

3 教育長・学校長へのアンケートの結果と考察

平成17年1月に、今回のアンケートと同じように本学を卒業・修了した教員に対する印象を徳島県内の教育長・学校長に尋ねているので、それとの比較も行い、結果を検討していくことにする(表2)。

(1) 鳴門教育大学の学部を卒業した教員の全体的な印象

すべての項目において肯定的評価を得ている。「1 教育者としての使命感や自覚がある。」「2 生徒(幼児・児童を含む。)に対する教育的愛情がある。」が4点を超えており、特に高い値である。「8 教職員組織の一員として、他の教職員との協調性がある。」「10 総合的に評価して、教員として満足できる。」も4点に近く、高い値である。そして、「4 教科指導(授業)において実践的力がある。」が3.9点、「7 保護者から教師として信頼されている。」が3.8点と続く。さらに、「6 学級経営において実践的力がある。」「3 広く豊かな教養がある。」「5 生徒指導において実践的力がある。」がそれぞれ3.6点とやや低くなり、「9 教職員組織において、指導力(リーダーシップ)がある。」は3.4点である。

前回(平成17年1月)と今回(平成19年10月)とを比較したが、有意差は見られなかった。

表2 教育長・公立学校長の本学を卒業・修了した教員に対する印象の平均値

	卒業生への印象		大学院修了生への印象		
	17年 (63人)	19年 (298人)	17年 (66人)	19年 (286人)	
1 使命感	4.10	4.14	3.67	4.00	**
2 愛情	4.16	4.11	3.48	3.93	***
3 教養	3.57	3.62	3.85	3.85	
4 教科指導力	3.78	3.87	3.75	3.93	
5 生徒指導力	3.48	3.58	3.54	3.65	
6 学級経営力	3.48	3.63	3.56	3.69	
7 保護者の信頼	3.73	3.81	3.39	3.78	***
8 協調性	3.89	3.98	3.42	3.80	***
9 リーダーシップ	3.38	3.39	3.59	3.66	
10 総合的評価	3.86	3.98	3.82	3.78	

・5段階評価(1 x 5)

・t検定(両側) \*\*\* p < .001, \*\* p < .01

(2) 鳴門教育大学の大学院を修了した教員の全体的な印象

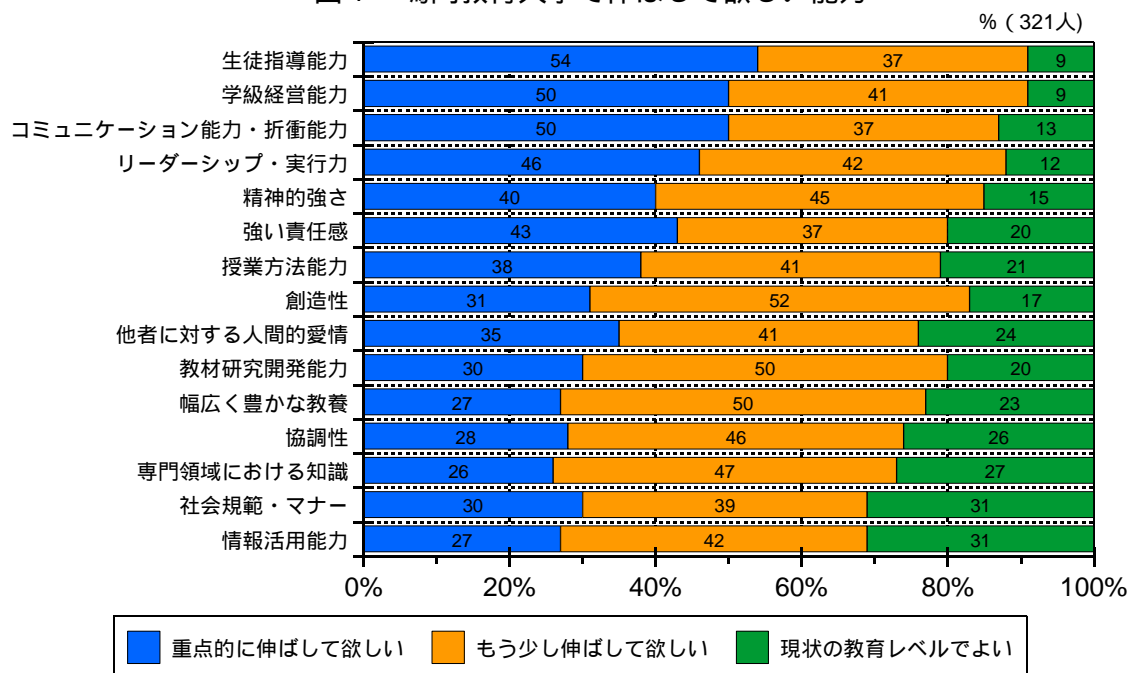
すべての項目において肯定的評価を得ている。「1 教育者としての使命感や自覚がある。」が4.0点であり、「2 生徒(幼児・児童を含む。)に対する教育的愛情がある。」「4 教科指導(授業)において実践的的力量がある。」「3 広く豊かな教養がある。」がそれぞれ3.9点と高い値である。「8 教職員組織の一員として、他の教職員との協調性がある。」「7 保護者から教師として信頼されている。」「10 総合的に評価して、教員として満足できる。」が3.8点と続く。そして、「6 学級経営において実践的的力量がある。」「5 生徒指導において実践的的力量がある。」「9 教職員組織において、指導力(リーダーシップ)がある。」がそれぞれ3.7点である。

前回と今回とを比較すると、10項目中、次の4項目で有意差がありいずれも今回の方が評価が高い。「1 教育者としての使命感や自覚がある。」「2 生徒(幼児・児童を含む。)に対する教育的愛情がある。」「7 保護者から教師として信頼されている。」「8 教職員組織の一員として、他の教職員との協調性がある。」。また、「6 学級経営において実践的的力量がある。」は有意傾向がみられ今回の方が評価が高い。

(3) 今後の教員の在り方を見据え、鳴門教育大学で伸ばして欲しい能力

図1に示すように、教育長・学校長は、「生徒指導能力」「学級経営能力」「コミュニケーション能力・折衝能力」「リーダーシップ・実行力」などの資質を伸ばすことを期待している。一方、「情報活用能力」「社会規範・マナー」「専門的領域における知識」「協調性」は、もう少し伸ばして欲しいという回答が多いものの、他の項目と比べて相対的ではあるが期待度は低い。

図1 鳴門教育大学で伸ばして欲しい能力



#### (4) 自由記述

現在、自由記述をカテゴリーに分類した上で、すべての記述を関係委員会に付託し検討しているところである。6月に公開する予定である。

#### (5) 教師のキャリア段階

教師のキャリア成長を考えると、第1段階(ステージ)として「1教育者としての使命感や自覚がある。」「2生徒(幼児・児童を含む。)に対する教育的愛情がある。」「8教職員組織の一員として、他の教職員との協調性がある。」は非常に重要である。次に第2段階として「4教科指導(授業)において実践的力がある。」「6学級経営において実践的力がある。」「5生徒指導において実践的力がある。」「3広く豊かな教養がある。」が来る。そして、これらの資質や力量をふまえ、第3段階として「9教職員組織において、指導力(リーダーシップ)がある。」が求められる。

今回の教育長・校長による本学を卒業・修了した教員の全体的な印象についての回答結果は、教師のキャリア成長を反映したものと見える。つまり、第1段階の項目ほど評価が高く、段階を進むにつれ評価が低くなっており、特に「教職員組織においての指導力(リーダーシップ)」「生徒指導」「学級経営」が相対的に低い。

ところで、「7保護者から教師として信頼されている。」が、卒業した教員と修了した教員ともに3.8点である。保護者は、教員が若いからとかキャリアが十分でないからという理由で信頼しない、という訳ではないことがわかる。

#### (6) 大学院修了生に対する評価の向上

教育長・学校長の大学院を修了した教員に対する印象が、「1教育者としての使命感や自覚がある。」「2生徒(幼児・児童を含む。)に対する教育的愛情がある。」「7保護者から教師として信頼されている。」「8教職員組織の一員として、他の教職員との協調性がある。」の4項目で、前回と比較し有意に高くなっている。

16年度からの法人化にともない、大学教員が大学院において専門知識を教えるだけでなく教師教育を一層重視するという意識改革が浸透したこと、教育委員会や学校との連携がより密になったことなどが、理由の一つとして考えられる。

#### (7) 学校における人間関係能力

今後の教員の在り方を見据え、鳴門教育大学で伸ばして欲しい能力として、教育長・学校長は「生徒指導能力」「学級経営能力」「コミュニケーション能力・折衝能力」「リーダーシップ・実行力」を特に期待している。

この結果と、先ほどの本学を卒業・修了した教員の全体的な印象において「9教職員組織において、指導力(リーダーシップ)がある。」「5生徒指導において実践的力がある。」「6学級経営において実践的力がある。」が相対的に低いという結果とは、軌を一にしており、これらはすべて学校現場における人間関係能力である。

#### 4 学部卒業生・大学院修了生へのアンケートの結果と考察

##### (1) 入学動機

本学への入学の動機を、6項目から1つ選択した結果を、表3と表4に示す。

学部卒業生の入学動機の一番高いのは「1 将来、教員になることを希望していたため」で67%であり、「2 本学の指導教員や授業科目に魅力があったため」の3%と合わせ70%の者が、本学に対し積極的な入学動機を持っていたと考えられる。

同様に、大学院修了者では、「1 自発的意志に基づく高度な教育実践能力を習得するため」が57%、「2 本学の指導教員や授業科目に魅力があったため」が15%、「4 研究者となることを希望していたため」が3%、これらを合わせ75%の者が本学に対し積極的な入学動機を持っていたと考えられる。

表3 鳴門教育大学への入学動機（学部卒業生） %（115人）

1 将来、教員になることを希望していたため	67.0
2 本学の指導教員や授業科目に魅力があったため	2.6
3 立地・通学条件がよいため	1.7
4 自身の学力に相応した大学であったため	14.8
5 本学進学を勧められたため	12.2
6 その他	1.7

表4 鳴門教育大学大学院への入学動機（大学院修了生） %（415人）

1 自発的意志に基づく高度な教育実践能力を習得するため	57.3
2 本学の指導教員や授業科目に魅力があったため	14.9
3 教育委員会からの推薦があったため	5.1
4 研究者となることを希望していたため	2.9
5 本学大学院進学を勧められたため	7.2
6 その他	12.5

## (2) 本学の教育に対する評価

次頁の表5に示すように、教育内容、教育環境、大学教員、学生生活、成果などの各項目ごとに平均値を求め、学部卒業生と大学院修了生との比較も行った。

「F2 全体としての満足度」は、学部卒業生が 3.7 点、大学院修了生が 4.1 点と高い値である(図2)。

「A3-1 卒業・課題研究における教員の指導」は、学部卒業生、大学院修了生ともに、4.1 点である。「C1 大学教員の教授・研究・指導力」は、学部卒業生が 3.5 点、大学院修了生が 3.9 点である(図3)。「C2 大学教員の人間的・教育的愛情(親身になってくれるか、勉学等に関して愛情をもって時には厳しく、時にはやさしく接したか)」は、学部卒業生が 3.9 点、大学院修了生が 4.2 点である(図4)。いずれも高い値であり、多くの学生が教員に対し肯定的な評価をしていると考えられる。そして「C 大学教員について」の2項目は、大学院修了生が学部卒業生と比べ有意に高い評価をしている。

「B8 大学全体における学習環境」は、学部卒業生、大学院修了生ともに、3.7 点と高い値である(図5)。施設、学習設備、図書館など、おおむね肯定的な評価を受けていると考えられる。ところで、「環境は無言の教育である」という言葉があるが、本学は日本一美しい国立大学ではないかと思われ、大学全体の環境が学生・教職員の心を癒していると考えられる。

「A1-1 講義の内容のレベル(高い)」は、学部卒業生が 3.1 点、大学院修了生が 3.5 点である(図6)。「A1-2 講義の内容の理解(分かり易い)」は、学部卒業生が 3.2 点、大学院修了生が 3.8 点である(図7)。「F1 教育内容の理解度」は、学部卒業生が 3.4 点、大学院修了生が 4.0 点である(図8)。学部卒業生は、講義の内容のレベルは普通であり、分かり易いかどうかについても普通であり、自らの理解度はややよい、と回答している。大学院修了生は、講義の内容のレベルはやや高いが、分かり易く、自らの理解度も高い、と考えていると推察される。

「E 本学で学んだことが社会で通用するか(十分役立った)」について、「E3 コミュニケーション能力・折衝能力」は学部卒業生が 3.8 点、大学院修了生が 3.9 点、「E4 他者に対する人間的愛情」は学部卒業生が 3.8 点、大学院修了生が 3.8 点と、いずれも高い値である。そして、「E9 リーダーシップ・実行力」は学部卒業生が 3.4 点、大学院修了生が 3.5 点である。「コミュニケーション能力・折衝能力」「リーダーシップ・実行力」の内容は、教師のキャリア段階によって異なるであろうが、学部卒業生も大学院修了生も各人なりにこれらの能力をある程度学んだ、と考えていると推察される。

「E11 授業方法能力」は、学部卒業生が 3.3 点、大学院修了生が 3.5 点である(図9)。「E13 専門領域における知識」は、学部卒業生が 3.5 点、大学院修了生が 4.2 点である(図10)。「E14 学級経営能力」は、学部卒業生が 2.8 点、大学院修了生が 3.2 点である(図11)。「E15 生徒指導能力」は、学部卒業生が 2.8 点、大学院修了生が 3.3 点である(図12)。大学院修了生は学部卒業生と比べ、有意に高い評価をしている。

学部卒業生は、「生徒指導能力」「学級経営能力」がともに3点に達していない。「授業方法能力」も含めたこれらの能力は、教師経験がほとんどない学部生にとって、講義による専門知識がたとえ実践的内容のものであったとしても、なかなか身につかないと考えられる。それゆえ、実習や演習を活用した教育方法の工夫により、これらの能力を伸ばすことが課題の一つである。

表5 学部卒業生・大学院修了生の回答の平均値

	学部卒業生 (115人)	大学院修了生 (418人)	
A 教育内容の質・量等について			
1-1 講義の内容のレベル(高い)	3.10	3.51	***
1-2 講義の内容の理解(分かり易い)	3.20	3.77	***
1-3 必修とされる講義の時間数(多い)	3.18	3.07	n.s
2-1 実習・演習の内容のレベル(高い)	3.40	3.47	n.s
2-2 実習・演習の内容の理解(分かり易い)	3.54	3.68	n.s
2-3 必修とされる実習・演習の時間数(多い)	3.17	2.98	n.s
3-1 卒業・課題研究における教員の指導	4.07	4.08	n.s
3-2 課題研究における満足度	3.61	3.97	***
B 教育環境について			
1 講義室・体育館等の施設	3.76	3.50	*
2 椅子・机・PC等の学習機材の設備	4.02	3.55	***
3 図書館の蔵書・環境	3.68	3.70	n.s
4 ゼミ室等個別的学習環境	3.25	3.22	n.s
5 事務窓口の対応	3.17	3.40	**
6 大学が企画・主催する行事(ガイダンス等)	3.32	3.15	n.s
7 大学が企画・主催する行事の時期及び期間	3.25	3.21	n.s
8 大学全体における学習環境	3.71	3.71	n.s
C 大学教員について			
1 大学教員の教授・研究・指導力	3.51	3.94	***
2 大学教員の人間的・教育的愛情	3.90	4.22	***
D 学生生活について			
1 修学支援	3.45	3.29	n.s
2 就職・進学支援	3.37	3.04	**
E 本学で学んだことが社会で通用するか			
1 幅広く豊かな教養	3.39	3.89	***
2 強い責任感	3.61	3.57	n.s
3 コミュニケーション能力・折衝能力	3.83	3.85	n.s
4 他者に対する人間的愛情	3.82	3.82	n.s
5 創造性	3.19	3.70	***
6 精神的強さ	3.57	3.80	*
7 協調性	3.90	3.78	n.s
8 社会規範・マナー	3.64	3.65	n.s
9 リーダーシップ・実行力	3.41	3.52	n.s
10 情報活用能力	3.50	3.92	***
11 授業方法能力	3.27	3.51	*
12 教材研究開発能力	3.37	3.62	*
13 専門領域における知識	3.50	4.16	***



14	学級経営能力	2.83	3.19	***
15	生徒指導能力	2.81	3.30	***
F 本学で学んだことの成果について				
1	教育内容の理解度	3.36	3.97	***
2	全体としての満足度	3.72	4.12	***

- ・ 5段階評価 (1 x 5)      5 : よい (高い, 多い, 分かり易い, 十分役立った) ~ 1 : 悪い (低い, 少ない, 分かりにくい, 役立っていない)
- ・ t検定 (両側)    \*\*\* p < .001, \*\* p < .01, \* p < .05

図2 F2 全体としての満足度

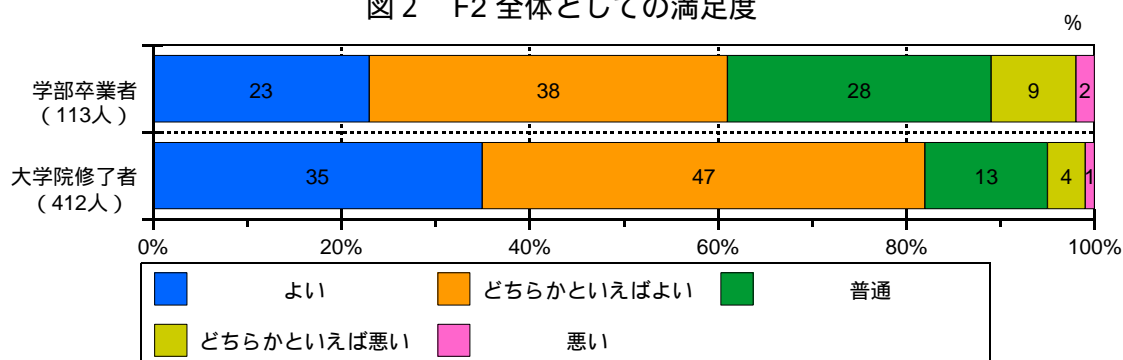


図3 C1 大学教員の教授・研究・指導力

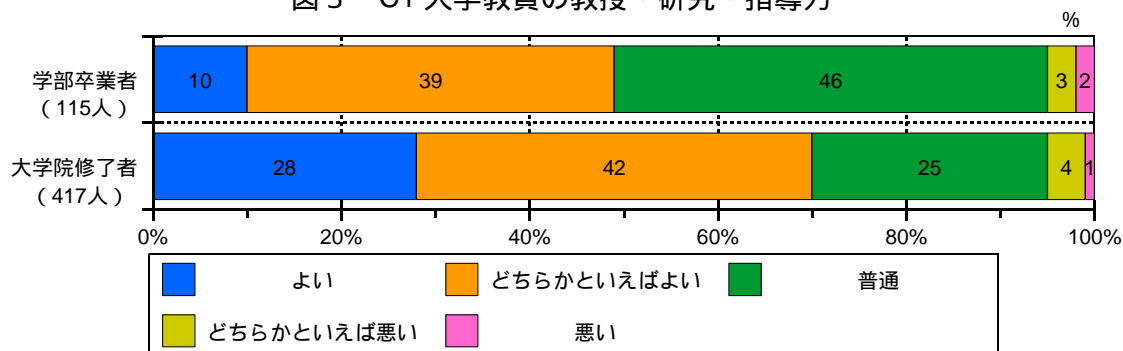


図4 C2 大学教員の人的・教育的愛情

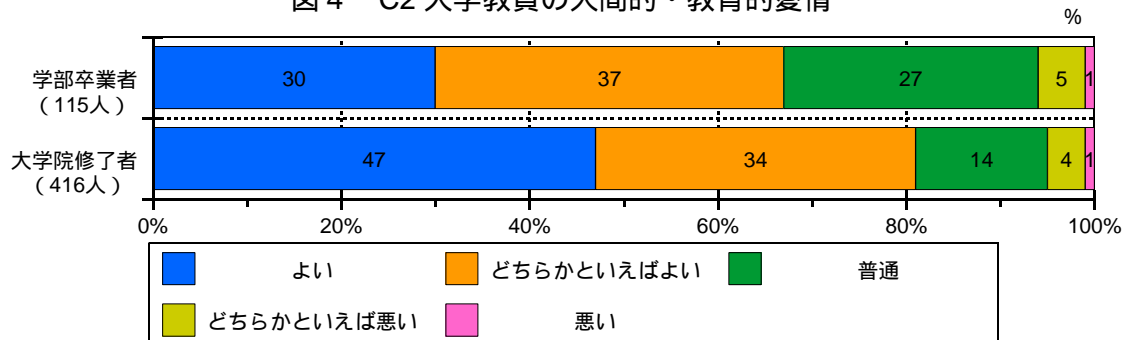


図5 B8 大学全体における学習環境

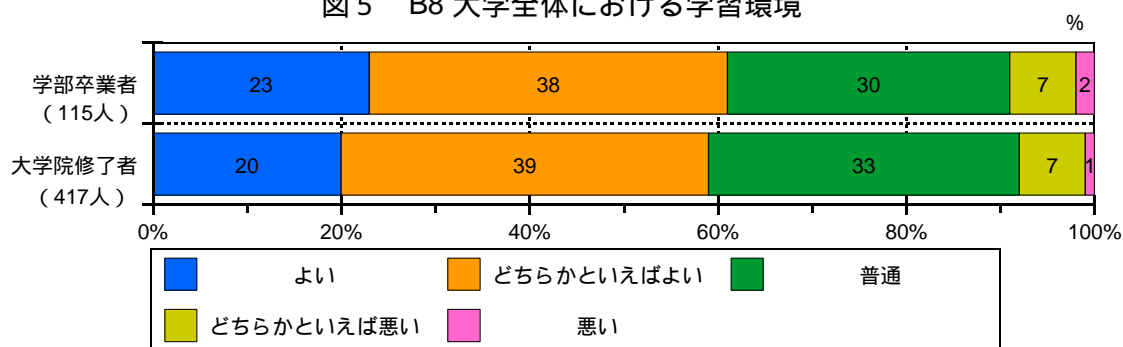


図6 A1-1 講義の内容のレベル

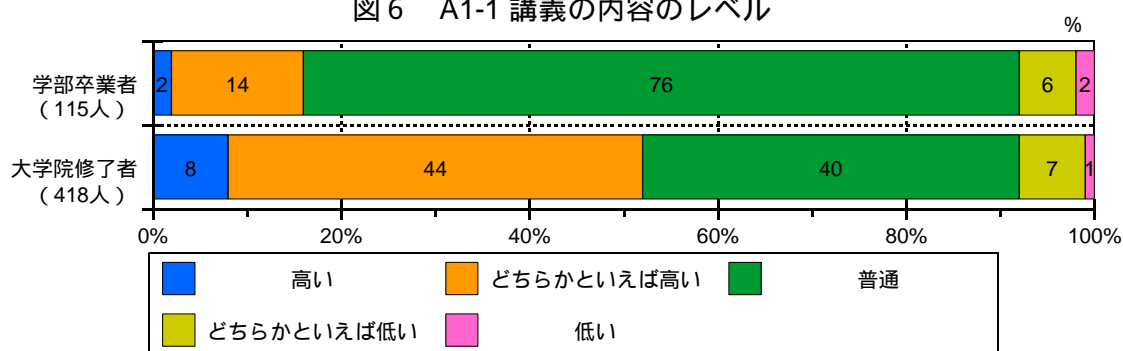


図7 A1-2 講義の内容の理解

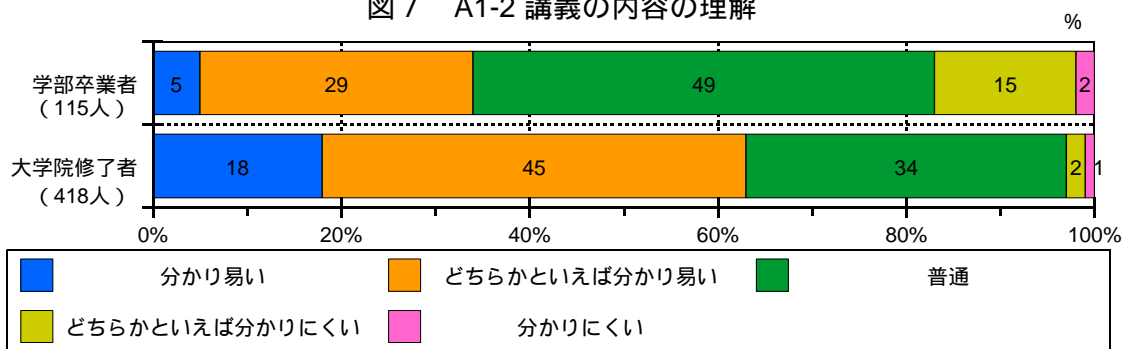


図8 F1 教育内容の理解度

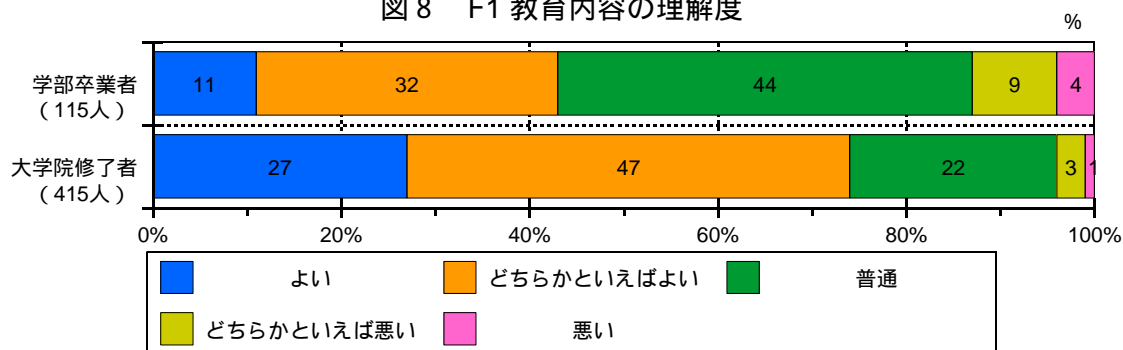


図9 E11 授業方法能力

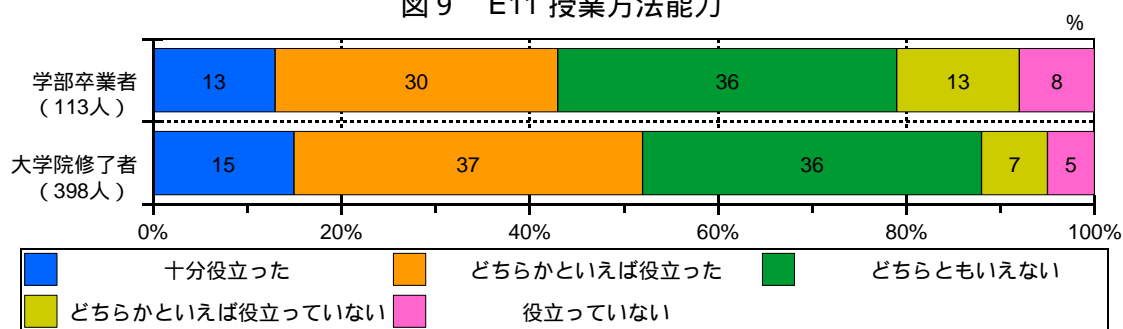


図10 E13 専門領域における知識

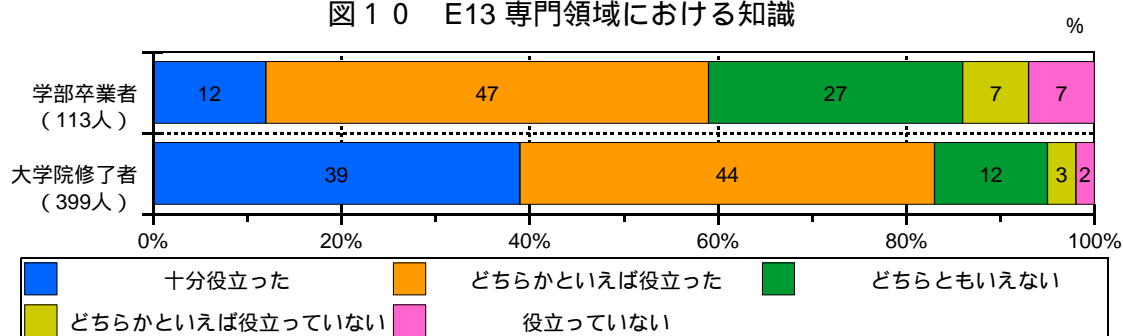


図11 E14 学級経営能力

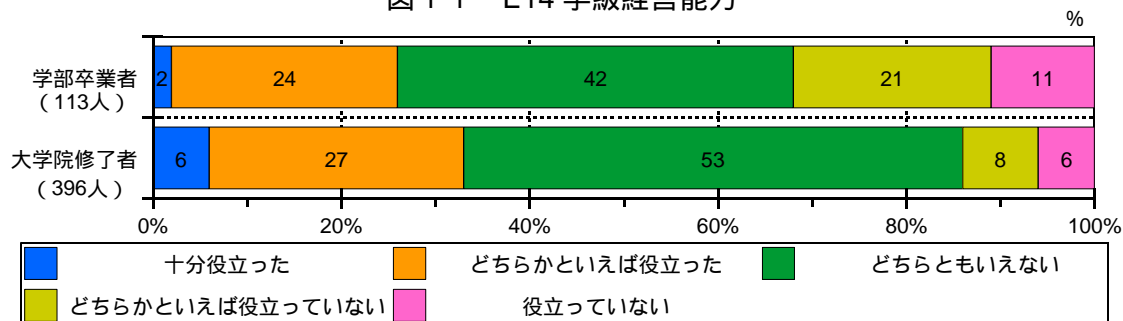
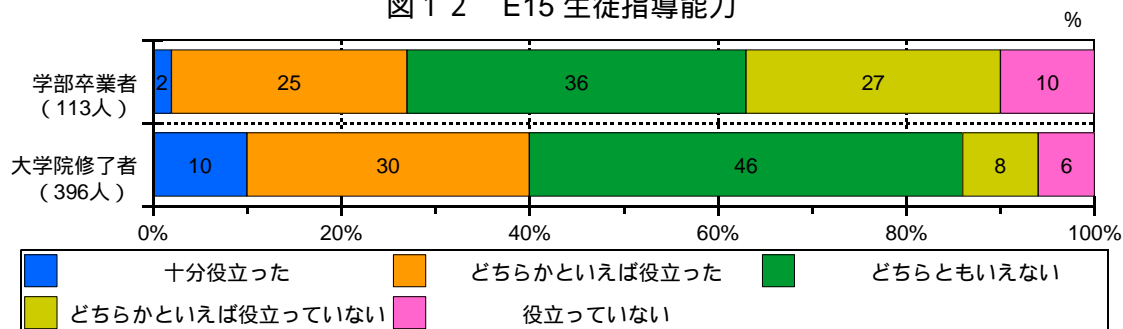


図12 E15 生徒指導能力



### (3) 自由記述

現在、自由記述をカテゴリーに分類した上で、すべての記述を関係委員会に付託し検討しているところである。6月に公開する予定である。

#### 5 鳴門教育大学・大学院の教育改革

「3 教育長・学校長へのアンケートの結果と考察」の「(7) 学校における人間関係能力」、ならびに「4 学部卒業生・大学院修了生へのアンケートの結果と考察」の「(2) 本学の教育に対する評価」で述べたように、生徒指導、学級経営、及びコミュニケーション、リーダーシップなど「学校現場における人間関係能力」を伸ばすことが、本学の教育における課題といえる。

まさに、この期待に応えるべく平成 20 年度から新しく設置されたのが「教職大学院(専門職学位課程)」である。教員として幅広い専門的知識と実践力育成のための共通科目(24 単位)を設け、授業方法も実践的な専門知識を講義するだけでなく、ケースカンファレンス、集団討議、シミュレーション、ロールプレイ、実習など多様である。

また、人間関係能力を内包した授業実践力を向上させるため、学部及び既設の大学院(修士課程)も新たな取り組みを行っている。例えば、学部では「教育実践学を中核とした教員養成コア・カリキュラム」の開発を行い、17 年度から実施している。既設の大学院においても、教員として幅広い実践的力量を育成するために必修科目として、共通科目(4 単位)、広領域コア科目(4 単位)、教育実践フィールド研究(4 単位)を 20 年度から新たに開講した。そして、17 年度から大学院において長期履修学生制度を利用した学校教員養成プログラムを開設したが、この長期履修生の教育を充実させるために教職キャリア開発支援オフィスを 20 年度に設置した。

さらに、学部では「教育実践の省察力をもつ教員養成」が文部科学省特色ある大学教育支援プログラムに選ばれ(18 年度～ 20 年度)、既設の大学院でも「教育の専門職養成のためのコアカリキュラム」が文部科学省専門職大学院等教育推進プログラムに選ばれた(19 年度～ 20 年度)。

以上、16 年度から鳴門教育大学は国立大学法人として新たに出発し、教育改革に次々と取り組んできている(表 6)。そして、20 年度卒業生・修了生は、上記の教育改革の下で学んできた最初の学生であり、21 年度は教職大学院の 1 期生が修了する。今後、これらの卒業生・修了生を対象に本学の教育改革の成果についてきめ細かに検証していく必要がある。

表 6 法人化(16年度)後の鳴門教育大学・大学院の主な教育改革

---

17 年度	学 部：新しいカリキュラム 大学院：長期履修学生制度を利用した学校教員養成プログラムの開設
20 年度	大学院：新しいカリキュラム 大学院：教職キャリア開発支援オフィスの設置 大学院：教職大学院の設置

---